グラスと氷と携帯と…

狐狸川ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グラスと氷と携帯と…

【Ｎコード】
Ｎ７２２８Ｃ

【作者名】
狐狸川ころり

【あらすじ】
佐和は昼はＯＬ、夜はクラブでアルバイトをする日々を送っていた。そんなある日、一人の男と出会い関係を持つようになる。しかし、相手を好きになればなる程、佐和はいつか来る別れに怯えるようになっていた。

前編

オレンジ色の間接照明が照らし出す、薄暗い殺風景な部屋。この部屋の住人は、快適な住空間と言う言葉には全く興味が無い様だ。

佐和(さわ)は見慣れた筈のその部屋に、今日は言いようのない寂しさを感じていた。

「ミナちゃん、どうしたの？」

隣に座っている男、湯木谷(ゆきたに)はそんな佐和の様子に気が付いたようだ。

「何か、あった？」

佐和は、ふ…と寂しげな笑みを漏らす。

「ううん、何でも無いよ。今日は、ちょっと疲れたのかな？」

左手でロックグラスを摘むように持ち上げ、手の甲を頬に当てて湯木谷へ顔を向ける。

カラン…グラスの中で、荒く砕かれた氷が音を立てた。

カラン…。

涼しげで、それでいて乾いたその音は、まるで今の佐和の心の中のようだった。

湯木谷は、そうか、と小さく呟いて、家に居る時は常にかけ流しているテレビ画面に視線を戻した。

そうなんだよ…。佐和は心の中で呟いて、湯木谷と同じ様にテレビ画面に視線を戻した。

二人が関係を持つようになったのは、ほんの偶然だった。

佐和が学生の頃からバイトをしていたクラブに、湯木谷が同僚と連れ立って訪れたのだ。最初の印象は、寂しげで何だかとても疲れた人だな…というものだった。

席に着いても湯木谷は第一印象通り、口数は少なく、笑うときも

静かに口元だけをふ…と緩ませる程度。
この時、佐和はこの人は、何が楽しくて生きているんだろう？と、何故だか酷く興味を持ったことを覚えている。
だからなのか、普段はあんまり自分からはしないのだが…自分の名刺の裏に携帯のアドレスと番号を書いて渡した。
自分では結構、勇気を出したつもりだったのだが、湯木谷は興味なさそうに、佐和からそれを受け取ってチラリと一瞥すると、そのままスーツの内ポケットにねじ込んだ。
佐和はその時、ああ、コレは連絡無いな、と少し落胆したのを覚えている。
しかし数日後、事態は思いも寄らない形で急転した。バイト用の携帯に湯木谷からメールが届いたのだ。
『今晩、食事でも如何ですか？』
短い文面。
それでも、佐和には酷く心が浮き立つ思いだった。
佐和のクラブのバイトは主に金・土の二日間。その他、ママから人が足りないと言われた日に入るといった不定期なもの。昼間は堅実にＯＬなんかをやっている。
その日は、昼間の仕事の後は完全にＯＦＦの日だった。
佐和は急いで了承の旨をメールで返す。すると思いの外、湯木谷からの返信は早かった。
『では、銀座の交番前に七時に』
佐和は思わず吹き出した。どうせ銀座で待ち合わせなら、どこかのデパート前とか、喫茶店とか幾らでも選びようがあると言うものだ。なのに、湯木谷は、交番前を指定した。
きっと、湯木谷はあの難しそうに寄せた眉を更に寄せ、一生懸命考えたのだろう。そう思うと佐和は、湯木谷に好意的な感情が生まれつつあるのを感じた。
なんて、可愛い人だろう。
佐和は待ち合わせの時間に合わせ、時間をかけて化粧を直し、し

っかりと身支度を整えて電車に乗った。
昼間の仕事場は丸の内だから、心の準備が整うより先に待ち合わせ場所に着いてしまう。
無意識に数回深呼吸をして、地下鉄の階段をドキドキしながら、ゆっくり踏みしめる様に上がった。腕に回したブレスレット型の時計の針は、待ち合わせた時間の十分前を指している。
佐和は湯木谷がまだ来ていないだろう、勝手に思い込んでいた。でも、心の中にチラリともしかしたら…と過ぎり、そっと交番前を覗いてみる。
そして直ぐに、佐和はくすっと笑いを漏らした。
何故なら佐和の予想を裏切り、湯木谷は既にそこに立っていたからだ。少し猫背に背中を丸め、所在無げにぼんやりと数寄屋橋交差点の車の行き来を眺めている。一目でそうだと分かる、くたびれたスーツは、長身痩躯の湯木谷の体にぴったりと馴染んでいた。
「湯木谷さん、早いんですね。待ちましたか？」
佐和は小走りに湯木谷の下へ近付き、声を掛けた。湯木谷は佐和の姿を認めると、おっとりとバツが悪そうに微笑んだ。
「ええ…あ、いえ。ただ、何だか銀座って来慣れないせいか…どうにも私はちょっと浮いてる感じがして…」
「いやだ、大丈夫ですよ！湯木谷さんっ！変な事言わないでくださいよぉ。そんな事言ったら、よっぽど私の方が浮いてますって！」
佐和はケラケラと口元を隠しながら笑った。湯木谷もそんな佐和を見て、困ったように眉毛を下げて微笑む。
その後、二人は湯木谷が友人に教わったと言うレストランに行き、食事をした。料理の内容がどうだとか、こうだとか、そんな事を綺麗さっぱり忘れてしまう程、佐和にとって湯木谷との時間は楽しく、素敵なものだった。また、湯木谷にとっても、佐和の屈託無さは新鮮で、刺激的だった。
それからの二人は、頻繁に連絡を取っては食事をしたり飲みに出かけ、逢えば逢う程、お互いの距離は縮まり…深い中になるまでに

はそう時間が掛からなかった。
しかし、二人の関係が深まれば深まるほど、徐々に佐和は一種の閉塞感に陥っていた。
決して、職業を聞かない、本名を聞かない。互いのプライバシーに立ち入らない。
いつの間にか、暗黙の了解で二人は互いに一本線を引いていた。
佐和は湯木谷に惹かれれば惹かれるほど、いつ湯木谷が自分の元を去っていくのか…。それだけが、夢にうなされるほど怖くなった。
だからこそ、このまま互いを知らないままならば、きっと別れをいつ切り出されても忘れられると思っていた。
大丈夫。
お互いを知ってしまえば、それだけ後で必ず苦しくなる…。
無性に泣きたくなった。
今は逢っている時ですら、その想いがどこか心の片隅に居座っている。
湯木谷は優しい。でも、本当はどうなんだろう？
既に二人が知り合ってから二年が過ぎ、三年目に入ろうとしている。その時間の経過は、濃密だった時の薄れを予感させるには十分の長さだった。
佐和は湯木谷を失いたくないと思う反面『この関係』が近い将来失われる事を感じていた。　だからこそ、二人で居ても寂しさだけが募った。
佐和は急に湯木谷の傍に居る事が辛くなり、席を立ち上がる。
「どうしたの？」
「…え？あ、氷が無くなったから」
無理に笑顔を作る。上手く出来ただろうか？佐和はそんな事を思いながら、勝手を知っている台所へさっさと足を向けた。
胸がチクリと痛む。どうして、こんなになってしまったのだろう？
分かっていた筈なのに、いつかそうなる事ぐらい、分かっていて今の関係を続けていたのに…。まるで、頭と心が別々の体を持って

いる様だ。
冷凍庫から買ってきた氷を取り出して、アイスペールへ入れ替える。
カラン、カララン…。
ぼんやりしていた所為で、大小の不揃いな氷が積み重なって一杯になり、大きな塊が一つ、転がり出す。
「あ…」
いけない、咄嗟に佐和は氷を掴もうと手を伸ばした。その冷たい塊は掴もうとすればする程、つるりと手の中から滑り出して行く。
「どうしたの？」
「きゃっ…」
ふいに湯木谷がひょっこりと台所を覗き込んだ。それに驚いた佐和は、ようやく掴んだ氷をシンクの中に落としてしまう。
「なに？氷と鬼ごっこ？」
「ち、違うよ！」
変に誤魔化そうとする自分に焦った。別に隠す事なんて無いのに…。
佐和は氷の雫で濡れた右手を近くにあったタオルで乱暴に拭った。湯木谷はそんな佐和を見て、表情を和らげてやんわりと微笑んだ。
「駄目だよ、そんなに乱暴に拭いちゃ…」
そう言うと、女性独特の小さな佐和の手を自分の大きな手で包み込む。
「すっかり冷たくなっちゃったね」
湯木谷はそのまま、佐和の手を屈み込んだ自分の頬にあてがい、ひんやりと冷たくなった掌へ唇を寄せる。
佐和は途端にかあっと耳まで赤くなる。掌に感じる湯木谷の温もり、唇、少し伸びたざらっとした髭の感触…。心臓がドキドキして息が苦しい。
「ミナちゃん…」
佐和は引き寄せられるままに、湯木谷の胸の中で抱き締められる。

また涙が出そうになって、佐和はギュッと強く瞼を閉じた。
嬉しい。
でも……それ以上に今は胸が苦しい。
湯木谷が佐和の頬へ掌をあてがい、上を向かせる。額、瞼、頬…次々と優しいキスが降り注ぐ。
「湯木谷さ…」
今日はそんな気分になれない、そう言い掛けた佐和を湯木谷は強引に唇を塞いで黙らせた。　逃げ出そうにも、そのひょろりとした印象とは違い、意外に湯木谷の力は強い。深く、長い、絡め取られるようなキス。いつしか、佐和は抵抗を止めていた。
「んっ…」
そっと静かに唇が離れて行く。それと同時に、ぎゅっと強く抱き締められた。
長い沈黙が二人を包み、次に口を開いたのは湯木谷が先だった。
「…ミナちゃんは、俺たちの関係をどう思ってる？」
佐和はドキリとした。熱くなった頬が、一気に冷えていく。
「湯木谷さん、は…？」
逆に佐和は問いかけた。少し意地悪い気もしたが、自分が答えるより先にどうしても聞きたかった。
心の整理をつける時間が、ほんの少しだけ欲しかった。
湯木谷は口を真一文字に引き結んで、困ったように少し考えてから言葉を出した。
「そう…だな、なんて言えばいいのかな。俺は、男だから…」
佐和はその湯木谷の言葉を聞いて、ああ…、と心の中にぽっかりと穴が開いたような寂しさを感じた。
佐和は必死に涙を堪え、震えそうになる口元を無理矢理微笑みの形にして答えた。
「そうね…私も、女だから……」
これで終わりにしよう。
湯木谷は優しい。だからハッキリと私に言えないのかもしれない。

きっと私は去って行かれる寂しさには、耐えられない。それは…余りにも苦しすぎる。
ならば、ここで、自分から、引き返そう…。
佐和はそう心の中で決意した。
湯木谷の肌の温もり、匂い、眼差し、全てが今でも愛しい。
これが最後。
その言葉を何度も心の中で繰り返し、湯木谷の全てを忘れないように、しっかりと心に刻み付ける。
間接照明の薄暗い部屋。
湯木谷は隣で静かに寝息を立てている。佐和はその穏やかな寝顔を暫く無言で見詰め、そっと手を伸ばし、湯木谷の少し伸びた髪を指先に絡める。
少しクセのある柔らかな髪質。いつも目が覚めると、くしゃくしゃに跳ね回り、直すのに苦戦していた。
「こんな寝方してると、また酷い寝癖が付くよ……」
湯木谷を起こさない様にとても小さな声で呟き、佐和は少し体を起こすと、今度は湯木谷の耳元に口を寄せる。
「…さようなら」
掛かった息がくすぐったかったのか、湯木谷が小さく唸り、寝返りを打った。
それを見て、悲しそうに佐和はくすりと笑い、後ろ髪を引かれながらも湯木谷を起こさぬよう静かにベッドを後にする。
手早く身支度を整え、鞄の中から湯木谷との唯一の繋がりである携帯を取り出した。
始めはメモリーを消そうと思ったが、手を止めて一瞬考え込んだ。そして、佐和の目に飛び込んできたのは、飲みかけのロックグラス。
美しい琥珀色だった飲み物は、溶けかけの氷によってその色を失いつつあった。何故かそれが、ふと今の自分の姿に重なり、佐和はグラスの中に携帯を入れる。
グラスの中の氷が、湯木谷との全ての思い出を薄めてくれる事を

願いながら…。

後編

湯木谷と会わなくなってから一週間。夜のバイトはその日の内に辞め、念の為にマンションも引き払った。

これで、完全に湯木谷との接点は失われた。

けれど佐和の心はまだズキズキと痛み、ふと気が緩めば涙が滲みそうになる。それでも、佐和はまだ涙を流さなかった。

本当はめちゃくちゃに泣いて、泣いて、泣いて…全てを忘れてしまいたかった。でも、そうしてしまうと、湯木谷との事が完全に過去になってしまう。それがとても嫌だった。忘れると決めたのに、まだ心は揺れている。

「井沢(いざわ)くん、悪いけど、コレを届けて来てくれないか？」

申し訳なさそうに、小柄でいつも泣きそうな顔をした社長が佐和を呼んだ。佐和が昼間勤めているのは小さな印刷会社で、社長他、社員が数名の小さな会社だった。

「私がですか？」

不思議そうに尋ねる佐和に対し、社長は更に泣きそうに顔を歪めて頼み込む。

「悪いんだが急に入った注文で、急ぎなんだ。時間が時間だし、私はこれから出なければならないんだよ。他の者も今日に限って皆、出払ってしまってね。キミしかいないんだ。場所はこのメモに書いてあるから、よろしく頼むよ。帰りは直帰で構わないから…」

佐和はじっと机に向かっているより、少し表に出たほうが良いと思った。にっこりと微笑んで社長の手元から、小さな紙袋とメモを受け取った。

「分かりました。行って来ます」

メモに書かれているのは、某有名大学の教授の名前。そういえば、社長はこの教授と友達であることを自慢していた。いつもは他の印刷会社に頼んでいるらしいのだが、急に枚数が入用になった時にこ

うして頼まれる事があるようだ。
佐和はさっさと机を整理すると、会社を出た。小さな雑居ビルから一歩足を踏み出すと、朝には無かったどんよりと暗い雲が、空を覆っていた。それこそ今にも雨が降りそうだ。
今朝見た天気予報では雨が降るとは言っていなかったので、傘を持たずに家を出ている。置き傘は会社の机の中だし、今更取りに行くのも面倒だ。佐和は仕方なく足早に駅に向かうと電車に乗り込み、目的地へと急いだ。
電車の窓を流れる景色をぼんやり眺める。
陰鬱に重く垂れ込める雲は、佐和の心を一層暗くした。
もしかしたら、私は後悔しているのかもしれない。あの時、黙って部屋を後にした事を…あの時、向かい合えなかった事を…。
重く沈んだ気持ちのまま、大学の受付を通り目的の場所へと向かう。
校内に足を踏み入れれば、若く希望に溢れた学生たちが賑やかに通り過ぎる。佐和はその姿を横目で眺め、溜め息を大きく一つ吐いた。
私は…いつからこんなに臆病になったのだろう？昔はあんなに無鉄砲で、無邪気に人を好きになれたのに、今ではその人を失うのが怖くて直ぐに逃げ出してしまう。
佐和にとって、ただ好きなだけで誰かと一緒に居られる時間(とき)はもう過ぎてしまったのだ。慎重に、間違えないように、傷付かない様に…もう、全力でぶつかってボロボロになる様な事はしたくない。
いつの間にか、佐和は大人の社会により適合して生きて行く為に、表面の取り繕った自分を演じることに慣れきってしまっていた。
作り笑顔、当たり障りの無い会話、無難な行動…。ほら、今だって一面識の無い人と問題なく対応できる。
「……それでは、失礼致します」
そう笑顔で目的の教授の下を去った後、佐和はすっかり疲れ切っていた。

初めて会う人にはいつもの何倍も気を使う。今は只でさえ気持ちが疲れているのに、追い討ちを掛けた様なものだ。
引き受けるんじゃなかったかな？と思いながら、気が抜けたように校内をぼんやりと歩いていると、何時しか知らない所に迷い込んでしまっていた。
佐和は慌てて周囲を見渡す。ココまで何処をどう通って来たのか、まったく分からない。ココは何処なのだろう？眼前には人気の無い古ぼけた静かな廊下が伸びている。
急にとてつもない心細さと、不安感に襲われた。胸の前に両手を合わせ、おろおろと目を泳がせる。まるで出られない迷路に閉じ込められた気分だ。
「どうしよう…」
シンと静まり返った細長い空間。
窓の外を見やると全く手入れがされていないのか、伸び放題になった草木が、暗く垂れ込める雲によって更に不気味な雰囲気を帯びている。
佐和は怖くて泣きそうになっていた。するとその時、天の救いか背後から声を掛けられた。
「どうしたの？何処の学部の子？」
佐和は飛び上がる程驚いたが、嬉しくなり急いでその人物へと向き直った。
学生と思われたのはちょっとガッカリだが、佐和は童顔で背が低いので良く学生に間違われる。本当は今年で二十七になるのだが…。
「あの、すいません…！私、迷っちゃって、出口を教え…て…」
言葉が途中で回れ右をして、口の中に帰って行ってしまう。
相手も豆鉄砲を食らった鳩の様に大きく目を見開き、佐和を言葉無く見詰めていた。
佐和の視線の先…そこに立っていたのは湯木谷だった。
たった一週間逢わなかっただけなのに、無精ひげが伸び、少しやつれた様に見えた。

「ミナ…」
信じられない、といった表情でポツリと湯木谷が佐和を呼んだ。すると、その声に驚いた佐和は数歩後ずさり、弾かれた様にその場から逃げ出した。
「まって、ミナちゃん、待って！！」
待てるわけなんか、無い。
そう佐和は心の中で叫んだ。逃げたかった。何処か遠く、何処でもいい、湯木谷の声が聞こえない場所へ、隠れたかった。
夢中で廊下を慌ただしく走り、手近にあったドアから表へ飛び出す。そこへポツリと空から大きな雨粒が、佐和の顔に落ちて来た。
「まって！話を聞いてくれ！！」
どんなに早く走っても、佐和より湯木谷の方がずっと早い。あっと言う間に追いつかれ、佐和の腕が湯木谷の大きな手に掴まれる。
「いや…！放して、痛い、湯木谷さん、手、痛いよ…！」
佐和は開いてる方の手でめちゃくちゃに湯木谷を打った。けれど、湯木谷は手を放すどころか、その手を逆に掴み取る。
「駄目だ！放したら、また逃げるに決まってる！お願いだ、ちゃんと話を聞いてくれ！！」
「いや、聞きたくない！いや、いやよ…お願い、放して…はなしてよぉぉ…」
佐和はその場にガクリと膝を落として泣き出した。それと同時に、空からは激しい雨が降り出す。
佐和の両腕を掴んだまま、湯木谷は今まで見た事も無い程に悲しい顔をしていた。ひょっとしたら、泣いているのかもしれない。
「なんで…どうして…何も言わないで消えたりしたんだ…！探して、探して、探して探して探して探して！！ずっと、探して！！ミナちゃんの名前も、住所も、何もかも知らない自分が苛立たしくて！俺は、俺は…！！」
湯木谷はそこで言葉に詰まった。何を言ったら良いのか分からなかった。どう言えば、気持ちが伝わるのか分からなかった。

激しい雨が二人を打ちつける。
佐和が涙と雨で濡れた顔を上げ、湯木谷に叫んだ。
「…だって、怖かったの！怖かったのよぉ！！湯木谷さん、優しいから、何時も優しくて、私に、優しくしてくれるから…！」
唇をかみ締め、佐和はありったけの声を絞り出す。
「貴方にだけは、飽きられたくなかった！捨てられたくなかったの！！…もしそうなったら、そうなったら…きっと私、生きていけない…生きていけない…から……！」
佐和は必死に言葉を繋いだ。いっそこのまま、雨と共に流れ落ちて消えてしまいたい…。
雨に濡れ、小さく震えるそんな佐和の姿が湯木谷の心を激しく揺さぶった。
湯木谷は言葉で伝えられない自分がもどかしくて、歯痒くて、とにかく何かを伝えたくて、乱暴に佐和の体を引き寄せて抱き締めた。
「……もう、どこにも行かないでくれ」
湯木谷の消え入りそうな小さな声が、佐和の耳元で囁かれる。
これは現実なのか夢なのか…。佐和は湯木谷の言葉に眩暈を覚えるほどの喜びを感じた。そして確かめるように、佐和はおずおずと湯木谷の服の裾を掴む。
遠回りして、ようやく本心を知る事が出来た二人。そして、その二人の上に降り注ぐ冷たい雨はまだ止まない。
けれど、遠くの空には小さく青空が覗き始めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7228c/

グラスと氷と携帯と…

2010年10月8日14時30分発行